

ニヴフ民族の口承に見出された交差対句の使用 —エカチェリーナ・フトククを話者とするテキストを題材として

大喜多 紀明

252-0311 神奈川県相模原市南区東林間4-25-3-B

Chiastic Structure in the Oral Texts of Nivkh Narrated by Ekaterina Khytkuk

OHGITA Noriaki

4-25-3-B Higashi-rinkan, Minami-ku, Sagami-hara, Kanagawa 252-0311, Japan ✉obkitan@yahoo.co.jp

はじめに

本稿では、ニヴフ民族であるエカチェリーナ・フトクク女史(以下、本稿では敬称を略し、フトククとする。)を話者とするニヴフの口承テキストである「化け物を見た話」、「冬住居の化け物」を調査の対象とし、修辞技法の一種である交差対句の使用について分析する。なお、本稿のテキストは、ヴラディミール・サンギが採録した録音資料を丹菊が日本語に翻訳し文章化したもの(丹菊・パクリナ2008)を使用した。

テキストの話者であるフトククは、1908年に生まれたニヴフ民族女性であり、かつ、ニヴフ語サハリン方言の話者である。なお、ニヴフ語のいわゆるサハリン方言は東方言とも呼ばれるが、本稿ではサハリン方言とした。

また丹菊・パクリナ(2008)は、「化け物を見た話」をケシュ(日本語に直訳すると「話」だが、一般的には「体験談」を指す)に、「冬住居の化け物」をトゥルグシュ(散文形式による昔話)にそれぞれ分類している。厳密に言えば、ケシュは体験談の形式を持つので口承ではない。またケシュとトゥルグシュの区別に関して、丹菊(2003)は、当事者にとってケシュとトゥルグシュの区分は本質的なものではないとしている。しかし本稿では丹菊・パク

リナ(2008)に準じ、「化け物を見た話」および「冬住居の化け物」をケシュとトゥルグシュとし、便宜上、2編を口承として扱った。なお、サハリンのニヴフ民族による口承ジャンルとしては、ケシュ、トゥルグシュ以外にングストシュ(いわゆる叙事詩)が知られているが、本稿では扱わない。

ニヴフ語は現在、消滅に瀕した言語となっている。丹菊によれば、2007年時点での流暢なニヴフ語話者は100人を越えない(丹菊2008)。また、フトククを話者とする本稿のテキストをサンギが採録した時期は1970年代だが(丹菊・パクリナ2008)、それ以降、現在に至るまでの社会的な情勢の変化に伴い、ニヴフ語およびニヴフ語を取り巻く環境も大きく変化した。サンギが採録した1970年代当時と現在のニヴフ語を比較すると、語彙や文法上の差異があることが確認されている(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。ヴラディミール・ミハイロヴィチ・サンギ採録資料。北東ユーラシアの言語文化、http://www.ling-atlas.jp/sources_sangi.html, 2013年11月26日閲覧)。

ニヴフ語には大きくは、主にサハリン東海岸方面で使用されるいわゆるサハリン方言と、アムール川下流域方面およびサハリン西海岸方面で使用されるいわゆるアムール方言(西方言とも呼ばれ

る) (白石・丹菊2013) の2種類の存在が知られている。サンギ採録のフトククによるニヅフ語は、基本的にはサハリン方言である。なお、サハリン方言にはさらにポロナイスク周辺、トゥミ川中流域、トゥミ川河口海岸地域の3地域で若干の差異があることが知られている(丹菊・パクリナ2008)。フトククが使用するニヅフ語に関しては、トゥミ川中流域方言からの影響が見受けられるものの、基本的にはトゥミ川河口海岸地域の方言と丹菊はみなしている(丹菊・パクリナ2008)。

以上の知見を踏まえ、本稿ではニヅフ語サハリン方言による口承テキストに見られる修辭的な特徴を明らかにすることを目的とし、サンギが採録し、丹菊が日本語訳をしたフトククの2編の口承テキストを題材としての調査を行った。

ニヅフ語サハリン方言の口承テキストには、Pevnov (2009) や Tangiku (2013) などがあるが、本稿で分析するテキストは、丹菊・パクリナ (2008) がテキスト化したものである。なお、この丹菊・パクリナ (2008) のテキストは、ニヅフ口承文学の再話作品の取材のためにヴラディミール・サンギ氏 (Vladimir Sangi, 1935-) が1970年代に録音した資料に基づいている(丹菊2009)。

ここで、本稿でテキストとした「化け物を見た話」および「冬住居の化け物」は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所によるウェブサイト「北東ユーラシアの言語文化」にも掲載されている。しかし丹菊・パクリナ (2008) における記載は細部で異なる箇所があり、より詳細であるため本稿では、丹菊・パクリナ (2008) に記載されたテキストを使用している。

これまでニヅフ語サハリン方言における口承テキスト(ケシュ、トゥルグシュ、ンガストシュ)を対象として、交差対句を分析する視点から調査を行った先行研究は現在まで皆無である。また、本稿ではニヅフ語アムール方言による口承テキストに関しては取り扱わないが、筆者が確認した限り、アムール方言の口承テキストを対象としての交差対句についての調査を行った報告も皆無である。これらのことから、本稿はニヅフ口承テキストに交差対句による分析を適用した最初の

試みといえる。

一方、口承テキストにおける交差対句の使用は、ニヅフに隣接する居住域を持っていたアイヌ民族の口承テキストで見られる特徴でもある。ここでニヅフの居住域と接していたアイヌ民族というのは、かつてサハリン(樺太)の南部を中心に居住した樺太アイヌのことである。北海道を居住域とした北海道アイヌの場合は、ニヅフ民族の居住域と地続きで接していた訳ではない。アイヌ口承に確認される交差対句については現在まで一連の調査が行われてきた(例えば、大喜多2013a, b)。筆者は、本稿が口承の構造におけるアイヌ民族とニヅフ民族の関連性を明らかにする上での新しい視点となると考えている。なお、交差対句という視点によるアイヌ民族とニヅフ民族の口承における構造的関連性に関しては、別の機会に報告する予定である。

テキスト

フトククが使用するニヅフ語は、基本的にはニヅフ語サハリン方言である(丹菊・パクリナ2008)。

本稿で扱うテキストは、フトククを話者とするケシュ「化け物を見た話」とトゥルグシュ「冬住居の化け物」である。以下、それぞれの、丹菊による日本語訳テキスト(丹菊・パクリナ2008)を引用転記する。なお、本稿で交差対句に関する分析を行う際、丹菊による日本語訳テキストを採用した。その理由は、ニヅフ語がSOV型であり(例えば、山本2002)、この点については日本語と同じであるので、交差対句の分析を行う上では、日本語訳テキストを使用しても大きな支障がないと筆者が判断したことによる。なお、各テキストに付された記号(例えば、[A]や[/A]など)は筆者によるものである。また、本稿では、引用元のテキストに施された改行をすべての箇所で省略した。

1. 化け物を見た話(ケシュ)

[A] 私は自分のこの目で化け物を見たんだよ、私たちの地元、[/A]…ええ！ 本当に化け物があったの？…[B] 空家があった。昔お姉さんたちが

いた家。まだ私が小さかった頃にお姉さんたちが住んでいた家だった。私のお姉さんの子供が…。(雑音ひどく聞き取れない)その子供は、私より年下で、私の妹より年上だった。[B][C]あるとき、みんなでハプス草という山菜を採りに行った。ハプス草を採りに行ったら、もうだいぶ大きくなっていた。大きくなっていたから、たくさん採ってその場で食べた。私もその子供も小さかったから、ハプス草を採ってからそれぞれ少し持って帰ろうとした。そのとき突然雨が降り出した。雷も鳴った。[C][D]その当時の私たちの家は川岸から遠いところにあった。家へ向かうと、草が生い茂っていて行き難かった。別の家に行こうとしても、そちらも草が生い茂っていて行き難い。一緒に行ったその子供はまだ小さかった(だから私たちは早く雨宿りしたかった)。お姉さんたちが住んでいた家、そこだけが家に続く小道がちらちら明るく見えていた。その家までの道には草があまり生えていなかった。[D][E]それで、その玄関に入って、奥の戸を少し開けた。少し戸を開けてその開いた戸口から中を見ると壁際の高くなった床の真ん中にとっても大きな人が一人座っていた。あぐらをかいて腕を組んで火の中だけを見つめていた。[E][F]巨人を私は自分の目で見た。私は自分のこの目で見たのだ。私と、私と一緒に来た子供はそれを見るとすぐに外へ出て行こうとした。[F][F]私はまだ幼かったけれど、誰かが昔話をするときにはいつでも行って聞いていた。「化け物を見たら、何を見たにしろすぐに踵を返して走って帰ること。それはやってはいけない。行って彼らを捕まえて、殺してしまうのだそうだ。向き返って逃げ帰るのだ。後ろへ、そいつの方を向いてからその目で見るとすぐに、後は後ずさりして、それから今度はまっすぐ背を向けて。それで化け物は追いつけないのだそうだ。そういうことだ」私は小さい頃こういう話をいつも聞いていた。[F][E]だから、化け物が私と一緒にいた子供を殺そうとしたときその子供はすぐに外へ出て、走って遠くへ逃げた。私も踵を返して戸口を通って外へ逃げ出した。[E][D]そうして、浜まで、いつも船を着ける波打ち際まで行った。湾のところ、波

打ち際まで行った。自分の村のほうへ。私たちは対岸に住んでいた。自分の村のほうへ行った。私と一緒にきた子供は、先に逃げだして走っていた。そして行くと、私はその子供に追いついて、一緒に走った。[D][C]もうハプス草はひとつも残っていない。ハプス草はみんな落っこちてしまっていた。その子供はさっき走ってきたが、自分のハプス草を持って来たのだろうか?いやいや。ひとつも、ハプス草はひとつも持ってこれなかった。[C][B]そうして村に帰って、家に帰って私たちは話した。全てこんなことがあったと言った。[B](昔は)[A]何の化け物を見かけたのであっても踵を返して逃げてから川の方へ向き直ってその目で(?)見るとすぐに、出かけて彼は背を向け、まっすぐ背を向けて逃げたものだろうだ。そういうことだそうだ。そう聞いた。これで終りだ。[A]

2. 冬住居の化け物(トゥルグシュ)

[G]ウイльта人が昔話をした。ウイльта人が昔話をしたんだが、その昔話と、今から私が話すもの、ニヅフ人の昔話は全く同じだ。全く同じなんだよ。[G][H]昔、ある人が昔、ある人が一人で、犬ぞりでどこかへ行った。近所を訪問したのか、遠まで[原文ママ]訪問したのか分からないが、その帰り道、風が強くなった。周りが何も見えないくらいに風が強くなった。死んでしまいそうなほど風が強かった。[H][I]それでもどンドン進んでいくと、大きな冬住居が一軒、そう、冬住居が一軒だけ立っていた。「あそこの玄関先に入ってちょっと体を温めて、泊まって眠りたいな」と考えた。[I][J]「誰かいるんだろうか」とあたりを見てから自分のそり犬たちをそばに引いてきて、つなぐ棒をたてた。そして犬たちをその棒につないだ。それから家に入った。玄関先に入ろうとしたとき、彼の先導犬(犬ぞりのリーダー犬)が、どうやってか縄から外れて彼の先にさっと入った。[J][K]ところで、昔の人たちは、冬住居の戸を「引く」と言ったものだ。引き戸になっているので、引いたのだ。引いて閉めて、引いて開けた。そういう戸だった。彼が引き戸を開けると彼の犬は

すばやく家の中へ飛び込んだ。[/K] [L] 奥のほうへ彼の犬が入ると何か騒がしい音がして、今度は静かになった。中をのぞいてみると、真っ暗だった。[/L] [M] 火もついていなかった。[/M] [N] 奥からひきかえして玄関先までもどった。玄関先で、壁材の白樺樹皮をはがして、樹皮だけをはがした。たくさんはがして、こまかくちぎった。樹皮をはがして持って戻ると家の奥のほうへ投げ込んでみた。だが何も起こらなかった。[/N] [O] 彼の犬の気配もなく、空っぽの家だけだ。[/O] [O'] この家は空っぽだった。[/O'] [N'] それから彼は白樺樹皮に火をつけて持って入った。炉のところへ行って樹皮をおいて焚き火にした。樹皮で焚き火をしたが、何の音もしない、何もいないようだった。怖くなって、外に出たり入ったりしていた。そうしてしばらくその家にいた。炉の向こう側の隅にあぐらをかいて座っていた。[/N'] [M'] 火を少し炊いて中が明るくなると、だんだん眠くなってきた。そのうち火が消えた。[/M'] [L'] すると音が聞こえた。あっちの方から「じいさん、首を回して、回して…」と声が出た。別のほうから「砥石をスツと研ぐ、スツと研ぐ」と声が出た。そしてまた別のほうから「息が切れてハア、ハア…」と、こんな風に声が出た。その声を聞いて(起きて)見てみると火が消えかけていた。そこでまた火を興すとその声は消えてしまった。[/L'] [K'] こうして(こんなことを繰り返して)怖い思いをしていた。明るくなると起きて戸に出た。[/K'] [J'] 自分の犬たちのところへ行ってみると、やはり彼の大切な先導犬がいなくなっていた。昨日一緒に入ったとき、何者かが犬を捕まえて食べてしまったのだろうか。彼はあの時、後から入ってみたが、中に犬はいなくなっていたのだ。[/J'] [I'] 彼は外へ出て、自分の村へ帰った。[/I'] [H'] 自分の家に着くと彼は何が起きたか話をしたということだ。「家に化け物がいたぞ。本当だ。古い家に化け物がいたんだ。やつは俺の犬を捕まえて丸ごと食べてしまった。あの家に行こう」と言った。そして友人を集めて、その家を捜した。天気が良くなってからその家を捜しに行った。あの夜に自分が行った道を行くと、本当にあの家があったそうだ。矢を作っ

て、めいめい自分の矢を作って持って来ていた。ひとりが戸を開けて、その家の中へ矢を射た。するとうめき声がして、すぐに…(中断)(雑音がひどい)外へ出て(…)射て、その翌日(…)で、言って、(…)何か(…)昔、おばあさんたちは、何でもどんなものでもみんな容器を、樹皮製容器や何かを…[/H'] [G'] これで昔話はおしまい。[/G']

分析の手法

交差対句は、構文に使用される修辞技法の一種である。例えば、A-A'、B-B'、C-C'、D-D'で示すことができる語、句、節の対が2対以上あり、A→B→C→D→D'→C'→B'→A'のような順序に配列する場合、本稿ではこれを交差対句と呼ぶ。対となる語、句、節どうしは、何らかの共通する事柄や関連する事柄を持つ。場合によっては、正反対の意味を持つ要素どうしが対となることもある。この修辞技法は、交錯配向法やキアスムスなどとも呼ばれるものだが、本稿では交差対句という呼称を使用した。

テキストの構造

本節では、テキスト「化け物を見た話」および「冬住居の化け物」について、前節の手法にしたがって分析を行った結果を表1、2に示す。

1. 化け物を見た話

Aでは、話者が「私は自分のこの目で化け物を見

表1. 交差対句「化け物を見た話」。

A	物語の導入(前置き)
B	状況説明
C	ハブス草を採集
D	姉の家(空家)へ向かう
E	家(空家)に入る
F	巨人の姿→子供が逃げようとする
F'	「巨人を見たら逃げなさい」: 言い伝え
E'	家(空家)から出る
D'	自分の家へ向かう
C'	ハブス草がなくなる
B'	出来事の説明
A'	物語の結語(まとめ)

たんだよ、私たちの地元にと」と言い、物語の中身に導くためのきっかけを作っている。したがってこの箇所は、物語の導入である。一方、A'は、この物語で話者が言いたいことのまとめであり、併せて、物語の終了を示す言葉が書かれている。ここで、AとA'に関しては、導入と結語という関係で対応している。

Bでは、物語の話者が、物語における登場人物と空家を、物語を聞く人に紹介している。一方、B'では、物語の主人公が、物語での一連の出来事を村の人に説明している。ここで、BとB'については、説明者および説明している対象は異なるのだが、事柄を説明をしているという点で共通している。なお、Bには雑音ひどく聞き取れない箇所があるのだが、前後の文脈から、この箇所には「私のお姉さんの子供」もしくは「私のお姉さん」に関わる事柄が書かれていると予想できる。

	B	B'
説明者	物語の話者	物語の主人公
説明事項	登場人物と状況	物語での出来事
説明の対象	物語の聴衆	自分の村の人

主人公親子の当初の目的は山菜（ハプス草）採りであった。Cには、ハプス草を採集する場面が書かれており、この場面では、親子は多くのハプス草を採取している。一方、C'では、親子がもう一度ハプス草のところに戻るのだが、その場所には既にハプス草がなくなってしまう。

	C	C'
目的	ハプス草採り	ハプス草採り
結果	採れる	採れない

C-C'では、親子によるハプス草採りという目的は共通している。しかし、結果に関しては、CとC'では正反対であった。

Dには、親子が空家に向かう様子が描かれている。一方、D'では、親子は自分の家へと向かっている。ここで、D-D'は、親子が他の場所へと移動するという点で共通している。

Eには、親子が空家に侵入する場面が描かれている。その一方、E'は、親子が空家を退出する場面である。空家への侵入と退出は正反対の行為である。この箇所では、親子の空家への侵入と退出が対応している。

Fには、空家の中にいる巨人を親子が発見し、子供が逃げようとする様子がある。一方、F'には、巨人を見たら逃げなさいという言い伝えについての記載がある。ここでは、Fに書かれた子供が逃げるという行為の根拠として、F'に書かれた言い伝えを位置付けている。つまり、FとF'は、行為と根拠との関係である。

以上のように、「化け物を見た話」は、合計6対の対応からなる交差対句によって構成されている。

2. 冬住居の化け物

ここで、Gには、「ウイльта人が昔話をした。ウイльта人が昔話をしたんだが、その昔話と、今から私が話すニヅフ人の昔話は全く同じだ。全く同じなんだよ。」という言葉がある。これは、今から話をする物語に対する前置きもしくは導入として位置付けられる。一方、G'は「これで昔話はおしまい。」とあり、物語の終了を宣言している箇所で

表2. 交差対句「冬住居の化け物」

G物語の導入(前置き)
H状況説明
I移動を続ける→「冬住居」を発見
J先導犬の縄がはずれる
K男が「冬住居」に入る
L騒がしい音→静かになる
M火がついていない
N樹皮を投げ込む→何も起こらない
O空っぽの家
O'空っぽの家
N'樹皮で焚き火→何もいない
M'火が消える
L'不思議な声→消える
K'男が「冬住居」から出る
J'先導犬がいなくなっている
I'自分の村へ向かう
H'出来事の説明→その後の出来事(?)
G'物語の結語

ある。したがってこれは結語に相当する。GとG'は物語の導入と結語の関係である。

Hは、物語の話者がこの物語の主人公である「ある人」と、ある人を取り巻く状況を、物語を聞く人に述べている箇所である。ある人は犬ぞりに乗ってどこかへ向かっている。また、ある人は強い風の中にいる。一方、H'には、物語の主人公が家に帰り、主人公が体験した一連の出来事を説明する場面が書かれている。その後、ある人は人を伴い、再び冬住居へと向かい、おそらくは化け物を退治することとなる。ただし、詳細に関しては、テキストの録音状態の問題で明らかではない。

	H	H'
説明者	物語の話者	物語の主人公
説明事項	登場人物と状況	物語での出来事
説明の対象	物語の聴衆	自分の村の人

ここでのH-H'は、何らかを説明するという観点は共通している。なお、H'における不明箇所にはその後の出来事について書かれているようであるが、仮にそうであるとすれば、この点についてはHと対応していない。

Iには、主人公が、強い風の中をどんどん進んで冬住居を発見する様子が描かれている。一方、I'には、主人公が冬住居を出て自分の村へと向かう様子がある。この両者は、目的地は異なるのだが、主人公が他の場所へと移動していくという点で共通している。

Jでは、主人公の先導犬が縄から離れて、冬住居に侵入していく様子が書かれている。その一方、J'は、先導犬がいなくなっていることを主人公が確認する場面である。ここでのJ-J'は、先導犬を失うという点で共通している。

Kには、主人公が冬住居の引き戸を開けたことにより先導犬が冬住居の中に入っていく場面が描かれている。一方、K'には、朝になってから主人公が冬住居を退出する場面である。ここで、Kには、主人公が冬住居に侵入するという言葉こそ書かれていないのだが、実際は、Kにおいて主人公が冬住居に侵入していると判断できる。このこと

から、KとK'は、主人公による冬住居への侵入と退出が対応していると筆者は解釈した。

Lにおいて、冬住居に犬が侵入した後、暫くは騒がしかったのがやがて静かになる様子を主人公が確認している。一方、L'では、不思議な声を主人公が聞く。しかし、この声は、主人公が火をともすことで消える。ここでのLとL'は、はじめに聞こえていた音(声)がやがて消えるという点で共通している。

	L	L'
はじめの音(声)	犬の音	不思議な声
その後	静かになる	消える

MとM'では、火がついていない様子と火が消えた様子が対応している。また、Nでは、主人公が白樺樹皮を冬住居の奥へと投げ込んでいる。しかし、その行為によっては何事も起こらない。一方、N'には、主人公は白樺樹皮に火をともして冬住居の中を確認する様子がある。しかし、火をともしてみても、主人公は怪しいものを発見しない。

	N	N'
確認者	主人公	主人公
確認行為	樹皮を投げる	樹皮を燃やす
確認結果	何も起こらない	何もいない

ここで、NとN'に関しては、主人公が冬住居を白樺樹皮で何かを確認し、何もいないという結果を得るという点で共通している。

OおよびO'では、空っぽの家という言葉が再現されている。

以上のように、「冬住居の化け物」は、H'の不明箇所はあるものの、合計9対の対応による交差対句で構成されている。

構造上の共通点と共通パターン

本節では、前節で示した、「化け物を見た話」および「冬住居の化け物」に見出された交差対句についての知見に基づき、両者の対比を行う。

はじめに、「化け物を見た話」における交差対句

と、「冬住居の化け物」における交差対句の要素における類似点を検討する。その上で、「化け物を見た話」と「冬住居の化け物」の構成に共通するパターンを導出する。なお、便宜上、本節では、テキスト「化け物を見た話」を(1)とし、テキスト「冬住居の化け物」を(2)とする。例えば「化け物を見た話」における対応A-A'を示す場合はA-A'(1)とする。

まず、A-A'(1)は、物語の導入と結語の対応であった。それに対して、G-G'(2)も、物語の導入と結語の対応である。また、A-A'(1)とG-G'(2)に関しては、物語の最初と最後の箇所配置されているという点も一致している。そこで、物語の最初と最後に配置された導入と結語の対応をI-I'(Iはローマ数字)とする。

続いて、B-B'(1)は、状況説明と出来事の説明である。一方、H-H'(2)にも、状況説明と出来事の説明が配置されている。しかし、H-H'(2)の場合はそれに加えて、H'にその後の出来事が配置されている。このH'のその後の出来事に関しては、B-B'(1)における該当箇所がない。よって、B-B'(1)とH-H'(2)に共通する事柄は、状況説明と出来事の説明の配置である。また、B-B'(1)とH-H'(2)は、それぞれ前から2番目と後ろから2番目に配置されているという点でも一致している。そこで、交差対句の前から2番目と後ろから2番目に配置された「状況説明」と「出来事の説明」の対応をII-II'とする。

D-D'(1)では、空家への移動と自分の家への移動が対応している。それに対して、I-I'(2)では、冬住居への移動と自分の家への移動が対応している。ここで、冬住居は実質的には空家である。したがって、D-D'(1)とI-I'(2)の共通点は、空家への移動と自分の家への移動が対応しているという点である。そこで、空家への移動と自分の家への移動の対応を、III-III'とする。

E-E'(1)は、主人公が家(空家)に入るという事柄と主人公が家(空家)から出るという事柄の対応であるのに対して、K-K'(2)は男が冬住居に入るという事柄と男が冬住居から出るという事柄が対応している。ここで、E-E'(1)とK-K'(2)に関

表3. 「化け物を見た話」と「冬住居の化け物」における構造の共通パターン。

I	導入
II	状況説明
III	空家への移動
IV	空家への侵入
X	生命的危機とその回避
IV'	空家からの退出
III'	自分の家への移動
II'	出来事の説明
I'	結語

しては、空家への侵入と空家からの退出が対応しているという点で一致している。そこで、空家への侵入と空家からの退出による対応を、IV-IV'とする。

F-F'(1)には、「巨人の姿→子供が逃げようとする」と「巨人を見たら逃げなさいという言い伝え」が配置されている。ここでの特徴は、主人公が空家で化け物(巨人)に会い、生命的危機に直面するが、無事にそれを回避するという点である。一方、L-L'(2)、M-M'(2)、N-N'(2)、O-O'(2)でも、主人公は空家(冬住居)で化け物に会い(ここでは、主人公は化け物の姿と直接対面したわけではなく、不思議な声を聞いている)、かつ、生命的危機に直面するのだが、やはり、無事にそれを回避する。ただし、この箇所に関しては、あくまでも、主人公が直面した状況が似ているのだが、(1)と(2)における対応の様子が類似しているという訳ではない。そこで、空家の中での、主人公が直面した生命的危機とその回避をX(カイ)とする。

表3に「化け物を見た話」と「冬住居の化け物」の交差対句の分析から得られた構造の共通パターンを示す。

まとめ

本稿では、フトククを話者とする2編のテキスト「化け物を見た話」、「冬住居の化け物」について、交差対句という視点から分析を行った。その結果、「化け物を見た話」に関しては、合計6対の対応からなる交差対句によって構成されており、「冬住居の化け物」に関しては、合計9対の対応か

らなる交差対句によって構成されていることが確認された。

また、「化け物を見た話」と「冬住居の化け物」に見出された交差対句についての対比を行い、2編のテキストに共通する要素の抽出を行ったところ、共通パターンを得ることができた。2編のテキストに関する限り、ジャンルとしてはケシュとトゥルグシュで異なるのだが、交差対句の構成に基づく構造に関しては共通している。この共通パターンが、他のケシュやトゥルグシュについても適用されるかどうかという点に関しては現時点では明らかではない。このことについてはこれから検証するつもりである。

本稿では2編のニヴフ語サハリン方言による口承テキストにおける交差対句を示したが、このことは、全てのニヴフ語サハリン方言の口承テキストにおける修辞として交差対句が使用されることを示しているのではない。無論、話者であるフトククの個人的な修辞の特徴（いわゆる語り癖）である可能性も現時点では否定できない。筆者としては、フトククを話者とする他のケシュやトゥルグシュ、さらに、フトクク以外の話者によるものを題材として今後も調査を行う予定である。また、ニヴフ語アムール方言の口承テキストについての調査も併せて行うつもりである。

なお、口承における交差対句の使用に関しては、ニヴフ民族と隣接する、樺太アイヌ（大喜多2013b）や北海道アイヌ（大喜多2013a）を話者とする口承文芸に見出されてきた修辞的な特徴でもある。筆者としては、今後、ニヴフ民族とアイヌ民族における口承文芸の構造的な関連を、交差対句を分析する視点から検討したいと考えている。

引用文献

大喜多紀明. 2013a. 上田トシを話者としたアイヌの散文説話「カラスに育てられた男の物語」に

ついでの考察：ストーリー展開と交差対句の対比. ポリグロシア 25: 95–106.

大喜多紀明. 2013b. 樺太アイヌの「トゥイタハ」に見出せる交差対句について. 年報人類学研究 3: 169–191.

Pevnov A. M. 2009. On some features of Nivkh and Uilta (in connection with prospects of Russian–Japanese collaboration). Linguistic world of Sakhalin: proceedings of the symposium, September 6, 2008. pp. 113–125. Graduate School of Letters, Hokkaido University, Sapporo.

白石英才・丹菊逸治. 2013. ニヴフ語アムール方言の基礎語彙. 北方言語研究 3: 201–212.

丹菊逸治. 2003. アイヌとニヴフのシャマン伝承. 千葉大学社会文化科学研究 7: 1–8.

丹菊逸治. 2008. ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集（ノグリキ周辺地域）. アジア・アフリカ基礎語彙集 51. 485 pp. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京.

丹菊逸治. 2009. ヴラディーミル・サンギ氏録音による1970年代のニヴフ語音声資料について. サハリンの言語世界: 北大文学研究科公開シンポジウム報告書. pp. 95–98. 北海道大学大学院文学研究科, 札幌.

Tangiku I. 2013. A case of Nivkh phonetic material: Possibilities of archiving recordings of endangered languages in the Sakhalin region. Journal of the Center for Northern Humanities 6: 157–165.

丹菊逸治・パクリナ. 2008. サンギ採録ニヴフ語サハリン方言音声資料集1: フトククさんの昔話と体験談. 65 pp + CD. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京.

山本秀樹. 2002. 世界諸言語の語順類型研究における諸問題: 地理的・系統的語順分布に対する研究序説. 人文社会論叢, 人文科学篇 7: 79–101.